八尾市「 地域展開型認知症サポーター養成講座からのつながりと見守り ～みんなでつなげようオレンジの輪～ 」

キーワード	地域のつながり　気づき　認知症地域支援推進員活動　協働

○ 自治体情報（令和元年９月３０日現在）

人　口	266,569 人	高齢者人　口	75,351 人（高齢化率 28.27%）	面　積	41.72 ㎢
市の紹介	八尾市は、大阪府中央部の東側、大阪平野の中心に位置し、東は信貴生駒山系を境に奈良県に、西は大阪市に接している。豊かな自然と古代から栄えた歴史に恵まれ、あたたかい人情をもった 27 万人の人々が暮らすまち。				

① 活動の概要

取り組み内容	認知症の理解、啓発、拠点づくり、地域の気づき　など
取り組みの実施主体	認知症地域支援推進員
連携した機関等	市、地域包括支援センター、介護保険事業所、キャラバン・メイト、介護予防サポーター、まちづくり協議会、民生委員　など
取り組み期間	平成 30 年４月から

② この活動に取り組んだきっかけと経過

・“認知症に関する知識不足”が高齢者虐待の理由になっていることが多くあった。

・“認知症サポーター養成講座をどこかでしていませんか？”との問合せが市にあった。
＊市主催では年１回、他は保険会社や町会等、団体からの希望のみでの開催で、限られた方しか受講することができない状況だった。

・地域の集まり（ふれあい喫茶、高齢者サロン、独居高齢者食事会、民生委員定例会など）では、“認知症の人への接し方がわからない”との声がよくきかれた。
＊そのために、認知症になると地域でかかわりを避けてしまうこともある様子だった。

⇒時間的にも場所的にも参加しやすい形で開催するため、薬局や施設等の市内各地の空きスペースを利用した「地域展開型認知症サポーター養成講座」を開催することとした。

③ 活動内容

平成 30 年４月　地域包括支援センター（以下、包括）などへ相談し、地域開催を行うための場所探し。
平成 30 年５月　民間薬局カフェブースで開催。※その他の場所も含め、年間９か所開催。
平成 31 年２月　八尾市地域ケアケース会議合同定例会で、地域展開の認知症サポーター養成講座、声かけ体験の取組報告を行い、多職種、関係機関へ周知、啓発。
平成 31 年４月　包括 15 か所の担当区域全か所での開催を企画。

④ 活動を進めていく上での工夫・配慮

・“認知症の人への接し方がわからない”との声への対応として、認知症サポーター養成講座の中に「認知症高齢者声かけ体験」を組み込んでいる。

・“認知症予防ゲーム”（参加者みんなで一つの輪になって座り、一緒に声をあげて笑い合うなかで短いゲームを次々とやっていく。ゲームが進むにつれて、運動量も指先から少しずつ増えていく。楽しみながら知らないうちに身につくように考えられたプログラムは一つ一つに意味があり、大きな効果につながる）を地域で自主活動しているグループと連携して、認知症サポーター養成講座と同日で実施して**今後の活動や集い場所、機会を創出している。**

＊集い場所については、民間の薬局にあるカフェブース、市が管理している公園内の休養スペース、グループホームや特別養護老人ホームの地域交流スペース、休日のデイサービスのデイルームや包括の活動室、市役所の出張所などを利用している。

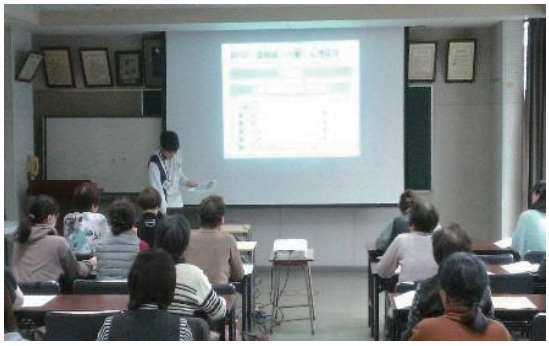
・認知症サポーター養成講座の開催日時は時間帯、開催曜日など幅を持たせて企画（午前、午後や平日、週末など）
・開催場所については、地域の隔たりがないように市内各地（日常生活圏域毎）で開催。
・**認知症サポーターが、開催運営に協力しやすい役割を考えた。**

＊会場設営、受付、参加者の案内、資材準備、機材動作、チラシ配り、シナリオを見ながら寸劇に参加、参加者の話し相手など、認知症サポーターに行っていただけそうなことを聞いてご協力いただいている。

・広報活動では“市政だより”で活動内容の報告や開催案内をしている。

・<u>各地域の団体（自治会、まちづくり協議会、高齢クラブ、民生委員など）と開催の案内等で連携した。</u>

＊各地域の団体との連携については、“顔なじみ”になるために、地域の祭りの手伝い、食事会、ふれあい喫茶、高齢者サロン、定例会、施設の運営推進会議などへの参加や、包括、社会福祉協議会へ相談して認知症サポーター養成講座や勉強会を企画するなど、できるだけ多くの接する機会を持つことで関係性を構築した。



⑤ 活動に取り組んで見えてきた効果・課題

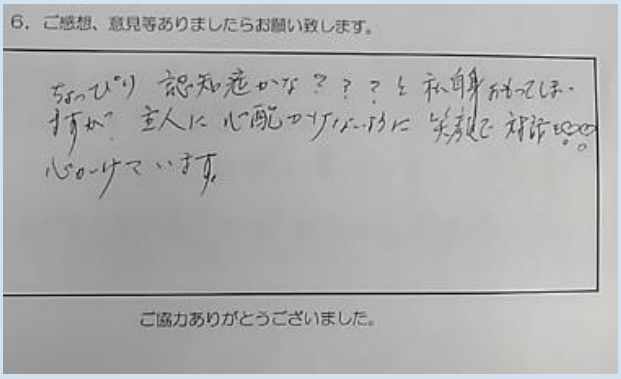
（効果）

・高齢者だけではなく、<u>学生や３０～５０歳代の参加者が増えた。</u>

＊曜日、時間帯を選択（就労中の人は週末のほうが参加しやすいことなど）できやすいように企画、市政だよりへの掲載、市役所窓口でチラシを配架、回覧板での案内、八尾市薬剤師会の実習生、一部の学校ＰＴＡの役員の方などへ周知した。

・認知症カフェなどでも講座を開催してもらえるようになり、認知症本人や家族の参加機会も増えた。

＜アンケートで若年性認知症本人が書いてくれた思い＞


6．ご感想、意見等ありましたらお願い致します。

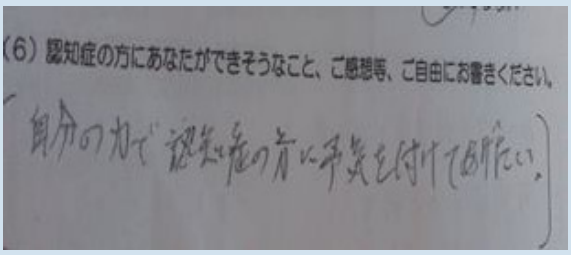
ちょっぴり 認知症かな？？？と 私自身 思ってしまいますが 主人に 心配かけたくないから 笑顔で 対応 ooo 心がけています。

ご協力ありがとうございました。

＜受講に至るまで＞

包括、認知症地域支援推進員（以下、推進員）、認知症初期集中支援チーム員（以下、チーム員）、ケアマネジャーが関わりながら、認知症本人、家族と信頼関係を構築した。推進員が自宅近くの施設で認知症サポーター養成講座を企画し、包括より認知症本人、家族へ案内し、当日はチーム員が一緒に参加している。企画した施設は、地域活動の教室が行われている等、認知症サポーター養成講座開催後の地域とのつながり等も考えて選定している。

＜認知症本人のアンケートで書いてくれた思い＞



＜受講に至るまで＞

包括職員が個別ケースを通じて、家族へ講座参加の声かけをすると、認知症本人も一緒に参加された。当日は、包括職員も認知症本人の様子を見に来られた。

・声かけ体験を認知症サポーター養成講座内に組み込み始めてから、**講座を受講・体験した方が、地域で道に迷っている認知症本人に声かけをして、保護をすることができたケースが３件あった。**

＊保護ができたケースの紹介

＜事例１＞　発見者：　地域ケアケース会議での声かけ体験参加者

（高齢介護課以外の市職員）

市役所付近で様子が気になる高齢者がいたため、声かけ体験を思い出して声かけしたところ、その高齢者には認知症があり、自宅に帰れない状況になっていたことがわかった（警察や市にも捜索依頼が出ていた）。市と包括が連携し、無事に自宅へ帰っていただくことができた。

＜事例２＞　発見者：　地域展開の認知症サポーター養成講座の受講者（一般住民）

自宅付近で、見覚えのある高齢者(誰かはわからないが、転居して自宅がこの付近ではないことは知っていた)が徘徊していたのを見て、声かけ体験のロールプレイで練習した通りに対応して、自宅へ送ることができた。

→　このケースでは、発見者が一人で対応したが、対応できない場合には、市や包括へ相談するなども確認した。

＜事例３＞　発見者：　地域展開型認知症サポーター養成講座の受講者
（認知症カフェの運営スタッフ）

認知症カフェの開催場所近くで、高齢者が道に迷っている様子であったので声かけをしたところ、その高齢者は、認知症カフェ開催場所ではない地域に住んでいることがわかった。このため、地域の町会長と連携して、無事に自宅へ帰っていただくことができた。

・活動取組当初は、ほとんど推進員が一人で企画、認知症サポーター養成講座を開催していたが、市包括、認知症サポーター、地域住民ボランティアなどつながりが増えた。
＊市内の全小学校で、３年かけて「認知症キッズサポーター養成講座」を開催することとなり、一部中学校でも認知症サポーター養成講座の開催依頼が増えた。

（課題）
・認知症サポーター養成講座受講後に記入いただいているアンケートの中で、記載されている相談内容に対応することができていない。
・認知症サポーター養成講座受講後の取組が構築されていない。
・声かけ体験を行うが、見守り体制の構築など、包括との具体的な連携ができていない。

⑥ 今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・キャラバン・メイト、認知症サポーターが各地域で認知症サポーター養成講座、声かけ体験の企画、開催を行う。

・各地域で、認知症サポーターが認知症本人や家族の見守り、相談のつなぎができるようになる。

・認知症疾患医療センターなどとの連携で、認知症サポーター養成講座の中で、認知症本人、家族の相談機会を確保することができるようになる。

・“認知症”というだけではない、お互いが“こころくばり”ができる地域づくりの一環になる。

認知症地域支援推進員
として

★ ちょっと認知症本人との啓発活動を始めました ★

＊認知症本人の活動機会や場所などをどのように設定したのか？
→「今、自分にできることをしてみよう」という推進員自身の思いでスタート。
今までの活動で場所を貸していただいたグループホームに相談した。
＊活動内容として、認知症の啓発グッズを認知症本人と一緒に作成している。
グッズは、ポケットティッシュに差し込む啓発チラシを詰める作業を行っている。
＊認知症本人については、グループホームの入居者に依頼。作業を行う際は、認知症本人へ認知症の啓発であることを説明して、一緒に作業を行っている。
（施設、家族には、グループホーム運営推進会議にて説明している）

完成品を市役所の窓口に置かせていただきました！！

【中河内圏域】
八尾市

この活動を通して見えてきたポイント

●介護者は、日々の介護に追われると、認知症の知識や情報を聞いても受け入れられる余裕がないことが多い。しかし、講座では話を聞く余裕もあるので、知識や情報を受け入れることができる場合が多く、介護者自身の振り返りの機会にもなっていた。
●地域では、認知症の知識不足により認知症本人を住民が避けてしまうことがあったが、基本的な知識や接し方を体験することで認知症本人への見方が変わっていった。
●認知症本人の参加が少しずつ増え、アンケートで認知症本人の声を知る機会になった。
●市内全域で開催していくことで、各地の地域住民や認知症サポーターとつながることができた。